



記念すべき試合、両校選手が整列した

硬式野球の明星大学—中央大学戦が、中大文学部・森正明教授のゼミ生によって、7月24日、中大グラウンドで実現した。隣接ながら、ありそうでなかった顔合わせ。企画実現に奮闘したゼミ生2人がリポートを寄せてくれた。

試合結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
明星大	1	0	0	1	0	1	0	0	0	3
中大	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2

明星大学 × 中央大学

モノレール・クラシコ開催 新たなる伝統の幕開け

伝統の一戦が育む新たな友情と愛校心

菊地しずく (森ゼミ生)

「じゃあ、明星大学が勝ったら、多摩モノレールの駅名を逆にして『明星大学・中央大学』にするとかどうですか」

本当にこんな軽い感じの話だった。父は明星大学で教授職に就いている。父のゼミ生にはなぜか野球部員が多く、部員が来宅することも珍しくなかった。

自然と野球部を応援するようになった私は高校時代、土曜日の放課後に試合観戦することもあった。

冒頭の会話は昨年2月末、来宅した明星大野球部員との冗談めいた話である。その頃の私は森ゼミに入ることが決まったものの、活動テーマを決めていなかった。

あの会話から「モノレール・クラシコ」は両校野球部を巻き込んだ企画へと一気に変化する。

ゼミでこの企画について話をす

ると、森先生は「試合ができるだけでも、大したもんだよ」と話した。中大は東都大学野球連盟、明星大は首都大学野球連盟。所属リーグ、歴史、経緯などをみれば、確かに試合挙行の見通しは立たない。それでも、その言葉を聞くたび私は「絶対やってやるからな」と思っていた。

試合が実現できた経緯を振り返れば、奇跡の連続でした。明星大学側に企画書を提出すると、その日のうちに浜井^{ひろたけ}濱丈野球部監督に企画書が渡っていたのだ。

浜井監督はさらに中央大学へ連絡をしてくださっていた。私が中大側に打診すると「その話は既に聞いています、試合を組む方向です」とびっくりする返答だった。

試合の開催は決定した。この時点で、最難関を超えたと思ってい



多摩モノレールの表示

たが、それは違った。試合だけでは開催目的の大きな柱、中大が提唱する「大学スポーツ振興」にはならない。

観客動員や応援要請など、ゼミ側が準備するのは、むしろ試合以外の部分である。結果的に、ここからが一番大変な時期となった。

ありがたいことに、明星大側から全面的なサポートをしていただいた。硬式野球部の山田茂雄総監督、学生サポートセンター・宮田隆司課長らの呼びかけによって、応援の手配、観客動員、ポスター

掲示など。

中大側はそうはいかなかった。試合開催日や部の活動状況などから、応援が整わなかった。ポスター掲示には曲折があり、事務職員の好意で FLP 事務室の掲示板に貼っていただいた。

上手くいかない状況に、イライラしたこともある。振り返ってみると、自分の知識不足、準備不足を受け入れ、交渉の中で何がベストかを模索する作業が、この企画で最も難しかった。

おかげさまで企画は大成功だった。野球好きとしては、試合をほぼ見られなかったのが若干の心残りではある。しかし、50 人を目標としていた動員は 200 人にも達した。

そして何と言っても企画のクライマックスは両校部員による試合後の交流会である。教室へ移動した。

中大・秋田秀幸監督が、「春と秋に年2回やりましょう」と明言してくださったのだ。

私は思わず叫んでしまうほど、本当にうれしかった。

「クラシコ」という言葉はスペイン語で、「伝統の一戦」という意味である。この言葉をつけた企画である以上、定期戦開催にこぎつけなければ成功とは言えない。

秋田監督の言葉は、この企画が「伝統の一戦」になるための一歩を築いてくださったのだ。これを受け、私も一般学生に周知されるような企画として開催できるよう、これからも考えていきたい。



左から村上さん、菊地さん、石田さん

森ゼミ生

ゼミ長 石田 彩乃(経3)
村上 未紘(総政3)
菊地 しずく(文2)

今回の企画は、多くの方々に助けていただいた。ど素人の企画に賛同していただいた中大・明星大両校硬式野球部の皆さま、両校関係者の皆さま、両校硬式野球部マ

ネジャーの皆さまらに、私たちは心から感謝申し上げます。

後日、うれしいことがあった。父が、明星大学野球部さんからのプレゼントだよ、と私の前に置いた。



和気あいあいだった交流会。右サイドが明星大、手前が中大

秋田監督「春と秋に年2回はやりましょう」

叫んでしまうほどうれしかった-菊地しずく

そこには「モノレール・クラシコ」の文字と監督、コーチ、選手たちの直筆の名前が入った木製

バットがあった。

バットを持つと、企画が実現できて本当によかったと改めて思う。

バットは、とても重かった。

モノクラを通して知る野球の面白さ

今回、企画のほとんどの手配を菊地さんが進めてくれたため、私はあまり力になることができず申し訳なく、私から語らせていただくのは恐縮なのですが、モノレール・クラシコに携わり気付いたことや感じたことをお伝えいたします。

準備段階において携わったのは毎週のゼミで企画内容についての話し合い、明星大学硬式野球部マネージャーさんへの企画説明と企画周知です。

試合当日は受付を担当させていただきました。明星大学硬式野球部と中央大学硬式野球部の応援にいらっしゃる、ご家族、OB、先生、友人たち。受付でこくわずかの時間ですが関わらせていただけたことにより、たくさんの方が両校の野球部を応援しているのだと直接感じることができ、とてもありがたい経験でした。

暑い中でも隣接する大学との対戦を楽しみに観戦していらっしゃる姿や好評だったアンケート結果を見ると、温かい気持ちにさせていただき、

また開催しなくてはという次回開催の原動力にもなると感じました。

私自身もボート部のマネージャーをさせていただく中で、大勢の方々のお力添えで「部」というものが成り立っていると痛感しております。

企画実現や成功に向けて、舞台裏では多くの方々の協力や応援をいただいています。そのつながりの強さがいかにすごいもので、素敵なおものであるかを教えていただきました。

試合後の交流会では、始まる前まではどうなることかと不安に思っていました。両校監督や選手たちが、

突然のインタビューなどこちらの無理なお願いにも快く引き受けてくださったので、笑顔があふれる会になったように思います。

私はそれぞれのチームをさらに応援したくなるような気持ちになりました。

今回の企画実施の上で、毎回来場者の多い「オープンキャンパス」と同日開催であったことが、動員増加に功を奏したように感じております。

私には初めての大学野球観戦でした。プロ野球は何度か観戦していて、野球観戦の楽しさは知って

石田彩乃 (森ゼミ生)



「モノレール・クラシコ」のポスターは2種類制作した

いましたが、今回改めて野球観戦の面白さ、楽しさを実感できました。

野球場に訪れた高校生の何人かに、なぜ観戦に来たのか調査してみました。ほとんどが野球部の部員経験がある人たち。また、野球が好きな野球女子がいることにも驚きました。

大学には多くの

野球サークルがあります。野球サークルに所属する私の友人も本企画に大変興味を持ってくれました。

野球は多くの中学校・高校に部活があり、身近なスポーツです。そのようにメジャースポーツであるからこそ、動員をさらに増



両校選手、関係者が揃った記念の1枚(撮影=菊地しずく)

やせる可能性をひしひしと感じました。

野球はルールを完璧に理解できていなくても楽しめるため、ファンをつかみやすく、さらに大学野球を応援したい人、観戦したい人を増やしていけると感

じました。

学友会常任委員会の方々も企画の宣伝をしてくださっていました。率先して企画をし、準備をしてくれた菊地さんをはじめ、本企画に携わってくださった全ての方に感謝をいたします。

森ゼミ

本企画の主催である森ゼミでは、「大学スポーツ振興」を大きなテーマとしています。

現ゼミ生はA生(第2学年)1人、B生(第3学年)2人の計3人が、中央大学・森正明教授のもと活動しております。

目標としては、日本の大学スポーツを知る、見る、聞く。表現する、考える〈玉木論〉ことを基礎に、新聞やテレビで報道されるスポーツの背景などについて、各自が分析を行い、それらの改善点について具体的な提案ができるようになることを掲げています。



明星大からプレゼントされた記念のバット。菊地さんが照れながら見せてくれた

企画概要

①目的

- (1)それぞれの愛校心を高める
- (2)野球を通じた両校の交流をはかる
- (3)両校野球部の強化
- (4)一般学生の学生スポーツへの理解促進

②目標

- (1)複数メディアに取り上げられる
- (2)一般学生が50人以上参加する
- (3)応援合戦を行う
- (4)選手個人間の交流を行う

(いずれも同ゼミ資料より)